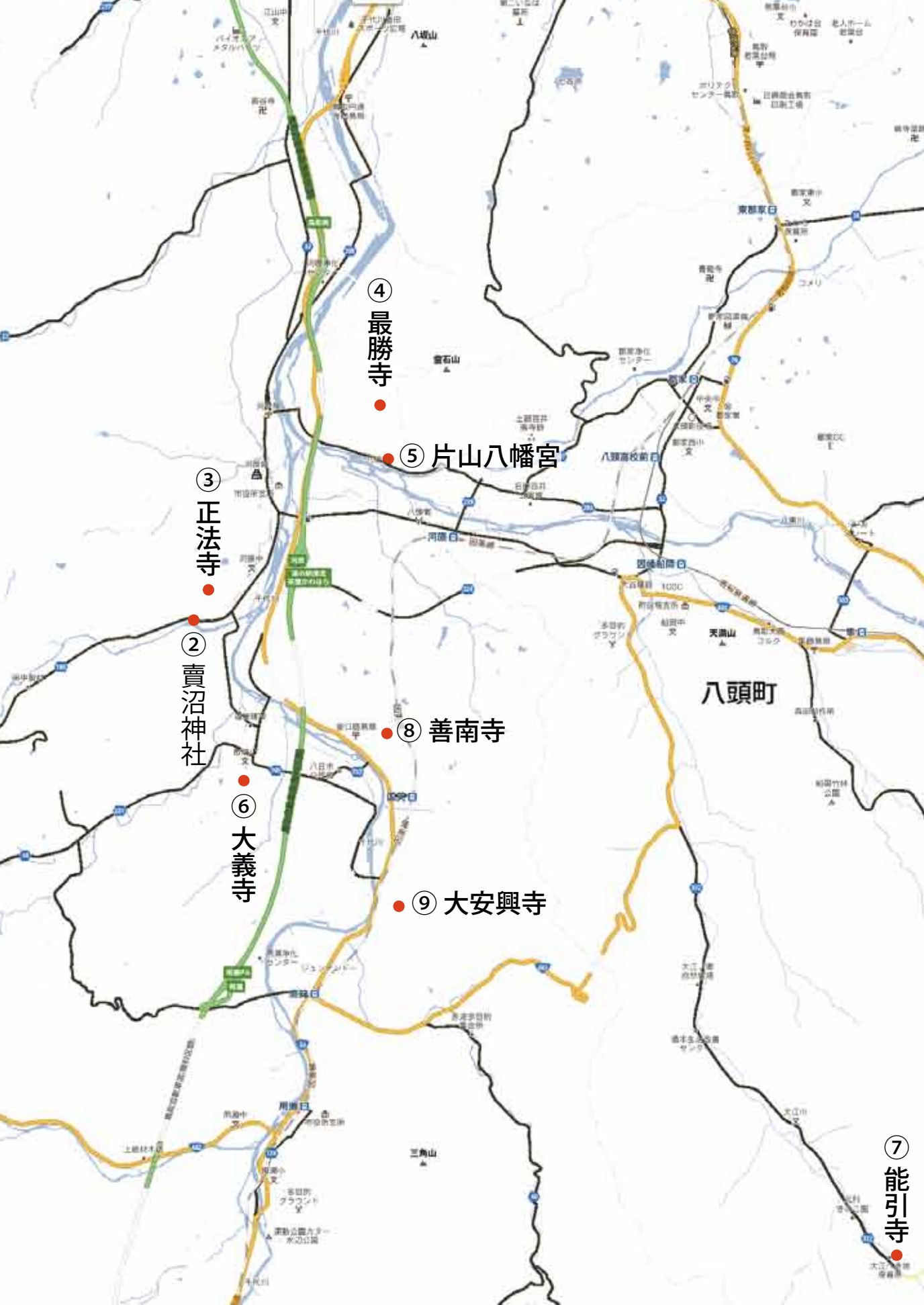
『稲葉佳景 無駄安留記』調査報告（八上郡篇）


④ 最勝寺
⑤ 片山八幡宮
③ 正法寺
② 賣沼神社
⑧ 善南寺
⑥ 大義寺
⑨ 大安興寺
⑦ 能引寺
八頭町

google map より作成

はじめに

無駄安留記は、安政五年（一八五八）に成立した地誌である。著者は米逸処という商人とされている。現在の鳥取県東部にあたる因幡国の八郡、邑美郡・岩井郡・法美郡・高草郡・気多郡・八上郡・八東郡・智頭郡の景勝地や旧蹟などについての文章、絵、和歌や狂歌が記載されている。ちなみに著者の自筆本は鳥取県立図書館に所蔵されている。

今年度は八上郡について調査を行った。八上郡とは、因幡国の中央に存在した郡で、旧河原町、旧郡家町の一部および旧船岡町の一部にあたり、平成十一年の市町村合併により現在の鳥取市、八頭町の一部となった。

八上郡の調査を通じて見えてきた無駄安留記の作者の意図について、ここでは訪れた場所の景観と歴史という二つの側面から考えてみる。無駄安留記では筆者が実際に訪れた場所においては、必ずといっていいほどその場所の景観・歴史がともに記されている。正法寺を例に出すと、はじめの一文だけで、美しく物寂しい様子の寺であるということと、昔は多くの人が群れをなして参詣していたことがわかる。このように著者は空間的な描写と時間的な描写を織り交ぜることで、地誌としての厚みと深みを持たせようとしたのではないだろうか。

このように、無駄安留記には八上郡の伝承・習慣・風俗・地理が幅広く記録されている。この報告書によって、八上郡という地域に暮らしていた人々の文化、生活を少しでも感じ取っていただけたら幸いである。

（窪田　恵里花）

三滝

三滝とは、鳥取市河原町北村の奥地にあり、大小様々な滝で知られる鳥取県の名勝である。『河原町誌』によると三滝渓は北村地区権現の森よりはじまり、口の景勝（権現の森付近）、中の景勝（桃子が口付近）、奥の景勝（いわゆる三滝を中心とした付近）から成っているという。昭和三十一年二月三日付で県指定の名勝となった。『鳥取県観光事典』によると三滝渓の滝はその多くが急崖を落ち滝壷が浅いのが特徴で、深淵のある小鹿渓とは植物景観を異にした独特の名勝地であるとされている。三滝という名称は四十余ある滝でも特に大規模な夫婦（めおと）滝、千丈滝、虹が滝に由来するといわれている。『因幡志』では三滝について「是（北村）よりたに奥三里餘に高山と號する險山あり。三國やまのきたに属すたきあり、三たきと號す。」との記述がある。

三滝は無駄安留記八上郡の冒頭でこのように記述されている。

美飛泉　八上郡北村より登る順途なり。人みだりに登りてたたりありし由。今は禁制す。

この本文を現代語訳すると「三滝　八上郡北村から登るのが一般的な道である。人々がむやみやたらに登って祟りがあったそうだ。今は禁制している。」となる。

本文の三滝には「美飛泉」という字が使われているが、これは著者が三滝の美しさを当て字で表したか、三滝を口頭で聞くことしかなかったために、「みたき」という字を予測して書いたのではないかと思われる。

鳥取藩の記録である『在方諸事控』には、文化十一年に村内の「三滝岩」で採集された生白石が鳥取藩に献上されたとの記述がある。「三滝岩」は「三滝渓」のことだと考えられ、このことから一八〇〇年代初頭には、三滝は登られることがあったと考えられる。また祟りと関係するのかは分からないが、北村には三滝に関する言い伝えが存在することが分かり、そのいくつかの言い伝えは雨と関連があった。その言い伝えは調査したところによると三つあり、一つ目は「三滝の最上位にある白糸の滝は、登ると雨の降る滝」であり二つ目は「三滝の滝壷（三滝の滝全ての滝壷か、どれか一ヶ所の滝壷なのかは不明）に石を投げると雨が降る」である。そして三つ目は「白糸の滝よりひとつ下にある不動の滝は雨乞いの滝」である。三つ目の言い伝えは『囲炉裏端』という北村の有志の文集に掲載されており、昭和四十七年に三滝に登った時の様子、感想などが記されていた。そこには「しばらくして不動の滝

夫婦滝

に出る。村の古老の話しにも出ますが、今なお旱魃に『雨乞い』で有名な滝である。」と記されており、このことから当時ではこの言い伝えは特に高齢の人の間で有名だったことが分かる。

当時の台風によって三滝林道にかなりの雨水が流れ、家が三件流れたことがあったそうだ。また終戦以前の三滝は現在のように道が整備されておらず少し登るのにも危険が伴ったに違いない。坂の急な三滝によるこのような危険性が、祟りと何か関連する可能性もあるのではないかと考えた。

実際三滝に行ったところ、整備されていない滝の近くなどは崖のように急になっていてとても危険だったし、急であればあるほど滝も勢いが増し美しくなるようだった。また冬になると全体が雪で埋もれてしまって交通止めになるそうだ。実際の三滝について調査すると期待する情報こそなかなか得られなかったものの、今回調査した内容は決して無駄なものではなかったと感じた。なぜなら、私にとって近所であり身近な存在であった三滝の今まで全く知らなかった言い伝え、それが地元の方々に実際に話されるのを聞くことで、言い伝えと歴史、地域の結びつきが実在することを身をもって感じることができたからだ。

これだけの記述では実際に著者が三滝付近に行ったかどうかは分からないが、もし行ったとすれば、美飛泉と書くような美しい滝に上ることができず、それを非常に残念に思ったのではないだろうか。

（窪田　恵里花）

権現の滝

白糸の滝

賣沼神社（ひめぬま）

賣沼神社の当時の絵は無駄安留記、『因幡志』に残っていて、「賣沼」を無駄安留記本文では、「ひめぬの」、絵では「ひめぬま」、『因幡志』では「めぬま」と記している。

賣沼神社は、大国主命の妻である八上姫を祀っている。『鳥取県古社寺百選』によると、八上姫は因幡の太陽のような存在であり、美人で、出雲の国からわざわざ男神たちが求婚にやってきたほど、とある。

私たちは賣沼神社に二度訪れた。神社は多くの木々に囲まれているので、どこか神秘的な雰囲気を漂わせていた。夏期には青々とした葉が夏の太陽の照りつけを阻み、日中なのに少し暗く、涼しい。紅葉の時期には銀杏の葉が境内を一面黄色に染める。また、「実際の広さ」よりも感覚的に広く感じ、ひとたび神社に足を踏み入れると、まるで森の中にいるようであった。また、神社の隣には曳田川八上姫公園があり、この公園の石の像には八上姫の浪漫を伝えるために、八上姫伝説のあらすじが絵とともに描かれている。一方、無駄安留記、『因幡志』の絵では共に本殿が木々に囲まれている。木に注目してみると、高さは無駄安留記の方が高いが、両方の絵に木が密集していることが分かる。このことから、当時から神秘的な雰囲気を漂わせていたことがうかがえる。

『因幡志』より

無駄安留記本文には、賣沼神社について、次のように記されている。

八上郡　曳田邑　賣沼神社　祭神八上姫の尊　是神世よりの鎮座。大巳貴尊の祟と云者を仲人にて娶たまひし女神なり。

社頭は岡上にして晴やかなり。故事は因幡志詳。

仲人の祟も今は通ふまじ
　岸の柳の猫におそれて

（八上郡曳田村　売沼神社　祭神は八上姫の尊　この神社は神話時代からここにある。八上姫の尊はオオナムチノミコトがねずみという者を仲人にして妻として迎えられた女神である。境内は岡の上にあって広々として明るい。由緒は『因幡志』に詳しく書かれている。仲人をしたね

ずみも今は通うことはできないのだろう、岸辺の猫柳をおそれて。）

『古事記』では、八上姫と大国主命と間を取り持ったのは「兎」であるが、本文では「鼠」とある。なぜ「鼠」と記してあるのだろうか。『因幡志』では次のような記述がある。

大巳貴命八上ひめを婚り玉ふ其媒こそ鼠といへる従者なればいまの世俗にても人に戀想の意を通ぜむとて鼠のなき聲を眞似るはこの故事にちなめるなりと。

（大巳貴命が八上姫を婚られた時の仲立ちが鼠という従者であるので、今の世の中でも人に恋の気持ちを伝えようとして、鼠の鳴き声を真似るのはこの故事にちなんでいるということだ。）

このように従者は「鼠」と記してある。当時、地元には八上姫と大巳貴命の仲人をしたのは、「鼠」だという伝承があったのではないか。

七福神の一人の「大黒天」の使者が「鼠」であり、大国主命は「ダイコク」と読めることから、大国主命と大黒天との習合があったと言われている。つまり、「大黒天の使者の鼠」が「大国主命の使者の鼠」としてみなされたということである。ここで登場する鼠は、シロネズミという種類で、毛が白く、眼が赤く、その住む家は繁盛すると伝えられる。

しかし、無駄安留記著者は兎と書かずに、なぜ鼠と書いたのだろうか。これは、著者が『因幡志』に鼠と書いてあるのを見て、無駄安留記に同じように鼠と書いたのではないかと考えられる。このことから、和歌の「岸の柳の猫におそれて」の部分は鼠と猫の関係を利用し、言葉を掛けたのではないかと推測する。

また『因幡志』で八上姫の出身地についての記述がある。

或記にいふ向に當國神社の旧記を見るに八上姫の舊居はいまの智頭郡用ヶ瀬郷宮原といふ村なり上古此所に八上姫住

猫柳（wikipedia より転載）
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8D%E3%82%B3%E3%83%A4%E3%83%8A%E3%82%AE

川辺の様子。猫柳はみつからなかった。

玉ふなり其の親の名は安藏長者といふとあり

（ある記録にはこう書いてある。以前のこの国の神社の古い記録を見てみると、八上姫の旧居はいまの智頭郡用瀬宮原という村である。その上、昔ここに八上姫が住まれていた。親の名は安藏長者である）。

このことから、八上姫の出身地は智頭郡用瀬町の宮原で、安藏長者という人の娘ではないかと考えられる。しかし、智頭郡の出身なのになぜ八上姫というのであろうか。このことについては不明である。

また、『因幡志』では「鼠」に関して驚くべき記述がある。

又命の袋を負ひ鼠を愛し玉ふは、因幡にゆき玉ふ時の故實なり鼠とは人の名なり

（また、大已貴命が袋を背負い、鼠を愛しなさるのは因幡に行きなさった時の故実である。鼠とは人の名である。）

故実とは昔の儀式・法制・作法などの決まりや習わし、先例となる事例のことである。ここで、「鼠とは人の名前である。」の部分に注目したい。「鼠」は動物の鼠ではなく、鼠という名前の人間だったのであろうか、このことについて、正しいことは分かっていない。

最後に私の感想を述べる。この調査実習を通じて、今まで神社について何も知らず参拝していたこと痛感した。神社にはそれぞれ歴史があって、それを知らずに正月などに参拝するのはもったいないと思った。これからは、自分の地元だけでも少し下調べをしてから参拝しに行こうと思う。

【参考文献】
『山陰の神々』山陰の神々刊行会　今井出版　二〇一一年
『因幡の白兎神話の謎』門田真知子　今井出版　二〇〇八年
『福の神と貧乏神』小松和彦　筑摩書房　一九九八年
『鳥取県古社寺百選』吉田正　牧野出版社　一九七六年

（門脇　仁志）

曳田川八上姫神社にある八上姫の絵

正法寺

正法寺は、現在の鳥取市川原町曳田の北に位置している。山号は龍洞山、宗派は真言宗御室派、本山は京都御室仁和寺である。

『河原町誌』によると、正法寺は、和銅二年（七〇九）に行基菩薩が開基し、弘仁年間（八一〇～八二四）に弘法大師が滞在したと伝えられている。当時は現在の鳥取市河原町神馬にあり、現在も跡が残っている。今から約四百年前の戦国時代に今の地に移転した。天正九年（一五八一）豊臣秀吉来伐の時兵火にかかる。当時の住職識尊は草堂を造り本尊を納め、自分は高野山に登った。慶長元年（一五九六）に紀州高野山平等院から明祐が下山して再興し、平等院の末寺となったが、延宝二年（一六七四）に仁和寺の末寺となった。

本尊として千手観音菩薩が納められている。このほかに、毘沙門天、不動明王、大日如来、虚空蔵菩薩、薬師如来、地蔵菩薩、阿弥陀如来も納められている。本尊の千手観音菩薩は十二年に一度、卯の年の春に、流水灌頂法会という祭りにて開帳される。副住職のお話によると、この祭りでは、鳥取県下の和尚が集まり、檀家の先祖を供養するそうだ。本堂での法要のほか、詠歌隊による詠歌や、現在鳥取ではほとんど行われていない護摩渡り、さらに、稚児による舞などが盛大に行われる。

無駄安留記には正法寺について次のように記述されている。

正法寺　弘法大師霊験あり。堂宇美麗にして寂々たる梵宇なり。昔は諸人群参せし由。

これを現代語訳すると、「正法寺　弘法大師の霊験が伝わっている。お堂は美しくひっそりしている寺である。昔は多くの人が群れをなして参詣していたということだ。」となる。

弘法大師の霊験についてだが、副住職のお話によると、弘仁年間に弘法大師が正法寺に滞在し、山にとどまっていたときに観音様が現れたのでここを聖地とし、お堂を建てたという伝説があるそうだ。正法寺にお堂が建てられたのは今から二四〇年前の明和八年（一七七一）のことである。お堂は京都の宮大工が建てたもので、他の寺よりも規模が大きく、当時では壮大な建築物であった。八上姫をまつる八上売沼神社と神仏一体での参拝もあり、多くの人が訪れていた。この頃が正法寺の隆盛期であった。よって、本文に記述されている「昔」はこの時代を指していると考えられる。

また、無駄安留記には次のような狂歌が書かれている。

御名を呼ぶ芋と稗とのなき年は

何を曳田にとりて空海

これを訳すと「ききんで作物が取れず救いを求めて空海の名を呼ぶときは、曳田では何を取って食っていたのだろう。」となる。「空海」には「食うかい」がかけられている。現地に調査に行ってみたところ、正法寺の周辺は畑や田んぼが多く見られた。『河原町誌』によると、当時の曳田も畑作や稲作が盛んであり、日照りによっては荒れる田畑があった。さらに、正法寺が建てられた一七七一年の干支は卯である。副住職のお話によると、昔から、卯の年は飢饉になるという言い伝えがあるらしい。現在の八頭郡智頭町にある極楽寺も卯の年(一七九五年)に大飢饉があったため地蔵が建てられているそうだ。作者はこれらの事情をふまえて、飢饉に苦しむ人々が空海や仏様にすがる様子が思い浮かぶこの歌を詠んだのではないかと考えられる。

次に、無駄安留記に描かれている絵について説明する。実際に現地を訪れ、無駄安留記に書かれている絵と現在の正法寺の様子を見比べてみた。まず、寺の入り口から見てみる。入り口の階段、階段横の燈篭、石の壁は現在とほぼ変わらない。しかし、入り口には無駄安留記には書かれていないたくさんの小さな地蔵が並べられていた。私は、地蔵がとても小さく、作者が描くのを面倒がって省略したのだろうかと思っていたが、副住職のお話によるとそうではないらしい。小さな地蔵はもともと正法寺の裏の山に置かれていたものだそうだ。かつてその山には八十八箇所の祠があり、その祠を巡礼すると四国八十八箇所を巡礼したことになるという「早めぐり」が流行していた。次第に流行が廃れてきたので、現在の住職が形の残っている地蔵を持ってきて並べたのだそうだ。

入り口の階段を登ったところに、無駄安留記には描かれていない門があった。この門は筆者が訪れた当時は無かったものなのだろう。門をくぐって全体を見てみると、無駄安留記に描かれているものと現在はほぼ変わらない。ただ、無駄安留記に描かれている絵の方が現在よりも敷地が広く見える。作者は敷地の広さまで正確に描かなかったのかもしれないが、もしかすると、広い敷地を描き、建物を小さく見せることで、本文に書かれている「寂々たる」様子を強調したかったのかもしれない。また、無駄安留記には、敷地内に、松の木が二本描かれているが、現在もほぼ同じ場所に松の木がある。現在はこの二本以外にも数本の松の木が生えているが、生えている場所が本堂のほぼ正面であるため、おそらく作者は、本堂を見えやすくするために省略したのではないかと考えられる。

次に、本堂を見てみると、形はほぼ変わっていない。柱も現在の

ものと同じに見える。屋根を見てみると、現在のものと形が少し異なっている。屋根の素材は、無駄安留記の絵では萱葺きのように見えるが、現在は瓦である。副住職のお話によると、明治の中ごろに屋根を瓦にして、後拝を修繕したのだそうだ。そのときに、屋根の形を変えたかもしれないとのことだ。また、無駄安留記には、本堂の右側に二階立ての建物が描かれている。現在この建物にあたるものは見られない。副住職のお話によると、無駄安留記に書かれている二階建ての建物は参篭所だったそうだ。明治十八年にどこかの神官住宅に移築したらしい。

総合的に見ると、無駄安留記の絵と現在はほとんど変わらないので、作者の絵はかなり正確に描かれているといえる。実際に現地に調査に行き、正法寺の姿が今でもほぼ変わっていないということに驚くと同時に長い歴史を感じた。無駄安留記の作者は隆盛期を過ぎた正法寺を訪れ、物寂しさを感じ、狂歌や絵を書き残したのではないだろうか。

（土方　真裕美）

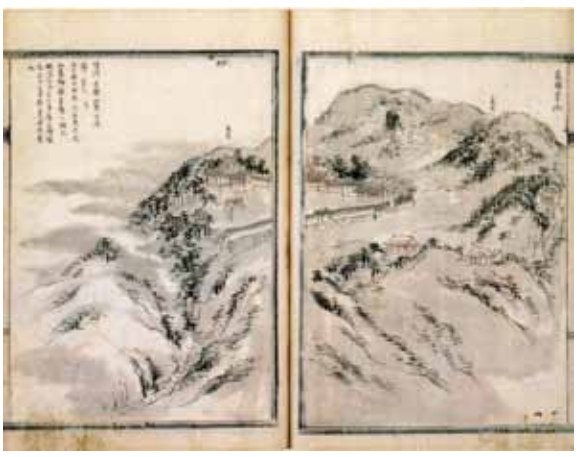
最勝寺

霊石山は「因幡の国の中央に位置し、古来より多くの人達に信仰の山として慕われてきた」（川口勝巳『勝龍漢詩集第一編　霊石山寓歩』一九九六年）。現在は、ハングライダーの離陸場所として有名である。最勝寺は、その山麓の鳥取市河原町に位置している。真言宗御室派であり、京都仁和寺の末寺にあたる。無駄安留記中には什物として、「元三大師筆　大般若経五十巻」、「唐恵果和尚筆　十六善神像」、「灌頂宝冠」、「鉄鉢」が書かれており、一つ一つ説明がされている。

無駄安留記本文には「和銅年中元三大師開基」とあるが、『因幡志』によると「和銅年中、行基が当地を訪れて草庵を開き、天暦年中（九四七～九五七）慈恵僧正（元三大師）が多数の仏閣と僧舎四二坊を造営し、霊石山最勝寺と号したという。」とある。本尊である薬師如来像は、行基が訪れた際、作製したとされている。この本尊は、『八頭郡誌』によると、仁和元年（八八五）から天暦元年（九四七）まで、長瀬の長谷寺に移されていたと伝えられている。『鳥取県の地名』には、「仁和元年頃に頼観が当寺まだ草庵であった最勝寺の本尊を移して建立、天暦元年まで安置」したことが書かれている。昭和一四年（一九三九）五月、火災で主な建造物を焼失し、昭和三〇年（一九五五）に旧寺地の霊石山西側中腹から現在地に移転した。寺跡は「奥の院」とされ、現在の最勝寺は新築移転されたものである。そのため、無駄安留記に描かれている絵とは異なっている。無駄安留記に描かれている最勝寺は、前住職さんのお話によると、建物は江戸時代からそのままのものであり、寺の前にある数軒の家々は門前町だと思われる、とのことだった。

現在の寺跡には、絵に描かれている石階段が残っており、本堂の周りに描かれている石仏もそのまま残っている。また、本文だけでなく絵の左上にも書かれている糸桜は、作者が見た当時の桜ではないが、現在も同じ位置に植えられている。糸桜とは、シダレザクラのことである。前住職さんのお話によると、かつては大きな桜であり、県の天然記念物でもあったそうだ。しかし、昭和一四年の火災で火を浴びてしまっていたため徐々に枯れてしまい、現在の桜は再び植えられたものである。『鳥取県文化財調査報告書　第二集』（鳥取県教育委員会社会教育課、一九六二年）には、「この地方の代表的シダレザクラとして有数である」とある。大きな桜は作者にとって印象深いものであったようで、本文でも桜について、

境内糸櫻はカガシ村豪農三木某庭中に糸櫻の大株有　是本ハ当寺の種なる由を伝へて後に（空白）頃にや又当寺へ若種を植継しものなりと



と、その由来が詳しく書かれている。また、絵の左上には「境内糸櫻紅葉名株」とある。現代語に訳すと、「境内の糸桜は、カガシ村豪農三木だれそれの庭の中に糸桜の大株がある。この桜は最勝寺にあった桜が元であるということが伝えられていて、その後、（空白）頃に再び、三木某の大株の若種を最勝寺へ植え付けたものが境内の糸桜だということだ。」となる。本文に書かれている「カガシ村」は振り仮名だけが書かれており、何村であるのかわからない。この「カガシ村」については、二つ考えることができる。一つは、「だれそれ」という意味である「かがし（彼某）」である。本文には、桜の若種をもらった頃が空白になっており、情報が不確かである。作者は村の名前がわからず、カガシ村と書いたと考えられる。

もう一つ考えられるのは、山手村「加賀瀬」（現鳥取市河原町山手加賀瀬）である。無駄安留記の著者米逸処は「かがせ」を「かがし」と聞いたが、漢字が分からないのでとりあえず振り仮名として「カガシ」と記しておいたのではないかということである。鳥取県立図書館所蔵『鳥取県郷土調査（一〇）』によると、加賀瀬の三木家は「八上長者」と呼ばれるほどの名族であったようだ。豊臣家と力を協せ、鳥取城を攻めるために因幡へ来、落城させた後、息子の居を因幡に定め、「因幡三木家の始祖」となった。四代目は宗旨庄屋を勤続し、直に大庄屋へ転役した。この三木家が桜の若種をくれた三木某ではないかと思われる。

無駄安留記の最勝寺の項には、最勝寺、糸桜の他に「水神社」、「荒神社」、「神の御子石」、「源範頼の墓」、「弁財天」が記されている。弁財天、神の御子石は絵に描かれていない。荒神社へ向かう道は現在ではわからず、前住職さんも「荒神社が近くにあるとは聞いたことがない」ということだった。ただ、お話によると「寺の近くには一つくらい荒神さんがある」らしく、今は知られていないだけで実在していた可能性はあるのではないだろうか。

水神社は現在でも、絵に描かれている石鳥居、石仏を確認することができた。しかし、無駄安留記に描かれている水神社とは異なり、鳥居と水神の間に、絵に見られる長い階段はなかった。現在、水神社へは最勝寺跡から舗装された右の道を通って真っ直ぐ行ける。水神社には昭和一四年の火災の際、避難させた本尊を上に安置したとされる岩があった。一緒に十二神将を全て持ち出したはずであったが、何度数えても十一体しかなく、持ち出されずに焼けてしまった一体は焼けて当時の住職の身代わりになったのではないか、と言われているそうである。

弁財天の場所は、無駄安留記に「此山裏

八東方ノ裾」と書かれており、これは霊石山米岡側の山のことであった。急な道を登っていくと弁財天を祀る祠があり、その後ろには本文に書かれている「五六尺（一五〇～一八〇センチ）許の岩」が一つあった。無駄安留記には岩は「二ツ立たる」とあるが、もう一つの岩はわからなかった。周囲には大きな岩が多く見られたため、それらのどれかかもしれない。また、「今年夏衆人群参すること数千万なりける」とあるが、数千万人では多すぎて不自然なので、「その数は千、万の単位で数えるほど多かった」と解釈すべきだと考えられる。

神の御子岩は、高さ約六メートル、幅約七メートルの巨石である。無駄安留記本文には、「裏山端の方　松樹の下に在　神代より伝」とある。しかし、これは作者が人から聞いたか昔から伝わっていることを書いた部分のようで、後の本文中で「神の御冠石ハ河原村の方西向山の半腹に大石見える物なり　樹ハ枯れてなし」とあり、作者が実際に訪れたところ、松樹は枯れて、なかったことが書かれている。また、

山風を谷間のすずに音たてて

雲の袖振る神のみこいし

という歌も書かれている。この歌は、巫女が鈴の音をたてて袖を振って舞っている様子を想像している。「みこいし」の「みこ」には「巫女」が掛けられている。霊石山には、天照大神が行宮された伝承が伝わっている。歌の中に「すず」が登場しているが、神を案内する際、鈴が使われることが多い。伝承によると、天照大神は、案内され、霊石山頂上にしばらく留まられた。そのため、天照大神が案内された伝承が元になっている歌であると思われる。この歌は、『八頭郡誌』には「山風を谷間のそこに音たてて　雲の神ぬる神のみこいし」、『漢詩集　霊石山寓歩』には「山風を谷間のそこに音たてて　雲の袖ぬる神のみこいし」とある。無駄安留記の和歌、狂歌はそのほとんどが、逸処がつくったものである。『八頭郡誌』、『漢詩集　霊石山寓歩』の歌の出典は不明であり、歌が少し異なって書かれている理由はわからなかった。

歌の元となっていると思われる天照大神伝承について説明する。霊石山の頂上には「腰掛岩」、「袖掛岩」という二つの岩があり、この二つの岩は「皇居石」と呼ばれ、天照大神がしばらく留まられた石とされている。このことから頂上は、「伊勢が平」と名づけられている。昔は遠足のコースにもなっていたようだが、現在、伊勢が平へ行くのは難しくなっている。実際に訪れることはできなかったが、頂上から行けるようである。神の御子岩の隣に立てられている看板には以下のように書かれている。

天照大神が行臨の時、道案内の神として猿田彦命が先導し、この岩に「冠」を置かれたので、御冠岩とも云った。猿田彦命は、道祖神であり、この岩はその御神体として、道行く人の道標であった。古

歌に「因幡なる神の御子岩しるしあらば、過ぎ行く秋の道しるべせよ」とある。

この古歌は、応神天皇御製和歌である。『郡家町誌』によると、応神天皇の西征の時、この地に来臨されて歌を詠まれたのは、「天皇の先祖」がこの地に行宮を営まれたことにあるという。この古歌は、『因幡民談記』にも書かれており、『松葉集』にこの歌が記されているとある。『漢詩集　霊石山寓歩』によると、猿田彦命は「應神帝御西征の際、此の岩に冠を忘れられ、石と化した」と伝えられるとある。この伝承が、霊石山と呼ばれる由来になっている。また、神の御子石はこの伝承より、「神の御冠石」、「烏帽子岩」とも呼ばれる。この伝承だと、天照大神を案内したのは「猿田彦命」である。しかし、『八頭郡誌』、『郡家町誌』では、猿田彦命ではなく、「白兎」が登場する。『八頭郡誌』には、以下のように書かれている。

住古大日霊尊此山に降臨あらせられ給い、群国を安撫して此山の絶頂に行宮を営ましめんとて四方を眺め給う折柄に、白き一兎現われ、尊の御装束の裾を咬へ道知るべしける。

「住古大日霊尊」とは、天照大神の別名である。道案内をした後、白兎は姿を消した。この白兎は道祖白兎大明神と云われ、霊石山の南麓の四か村の氏神として崇められている、とある。また、「霊石山麓の城光寺と慈住寺の縁起には、『霊石山に天照大神が行幸され、そのとき白兎が大神の御装束を銜えて西方の伊勢が平まで道案内された』と記されている」（大江幸久『八上神秘の白兎と天照大神伝承――もう一つの因幡の白兎神話　天照大神行幸と御製和歌の伝わる』ブイツーソリューション、二〇〇七年）。この伝承と関連して八頭町に三つの白兎神社が存在し、八頭町米岡にある神社は、元は伊勢が平にあった社を遷座したものと伝えられる。白兎が冠をしていることはなく、この白兎が案内した伝承では、冠を置いたのは「天照大神」である。

作者は神の御子岩の伝承については書いていないため、作者がどちらの伝承を思って歌を詠んだのかはわからない。どちらの伝承も知っていたのかもしれない。天照大神の伝承は全国各地に伝わっているが、天照大神の具体的な伝承が伝わっていることは、全国的に見ても極めて珍しいことだろうと思われる。どちらの伝承も伝えていくことが大切だと思った。

（岡　綾香）

源頼範の墓

無駄安留記本文には、源範頼の墓、遺品である太刀、鎧、馬具、如意輪観音像、そして、吉見氏について記述されている。

無駄安留記の最勝寺の項では、以下の記述がある。

境内　蒲冠者範頼公古墳。山裾の田圃の側に在。〔法名頼賢と改号〕。

これによると、境内に源範頼の古墳が、山裾の田畑の側にあると記述されている。実際に、調査に行くと、源頼範の墓は、現在の霊石山山頂のハングライダー場へ登る道中の、神の御子石がある場所より少し登った所にあった。

さて、ここで出てくる源範頼とは、どういう人物であったのか。源範頼は、源義朝の六男で、遠江国蒲御厨（現在の静岡県浜松市にあたる）で生まれ育った。そのため、蒲殿、蒲冠者とも呼ばれる。作者も無駄安留記本文では、この名で書いている。範頼は、治承・寿永の乱で源頼朝の代官として大軍を率い、弟の義経と協力して義仲・平氏を滅ぼす。その後、頼朝に謀反の疑いをかけられて伊豆の修善寺に幽閉された。

範頼の死については、諸説ある。伊豆の修善寺で誅殺されたというのが通説である。また、その修善寺から逃げ落ちて、越前や武蔵野国に逃げ落ちたとも伝えられている。この因幡国には、どういう伝説があるのか。『因幡志』には、次のように記されている。

建久四年源範頼臣難を当山に避け、後薙髪して教頼法師と改め、建久八年十一月十日この寺に寂せらる

これによると、範頼は建久四年（一一九三）に修善寺から逃れて、最勝寺にて出家して、名を教頼と改名し、潜居していた。同八年（一一九七）に没したということだ。

続いて、無駄安留記本文の解釈をする。まず、太刀についての本文の記述は以下の通りである。

太刀は無銘一振遺す。先年瑞徳院慶邦卿の時有名の太刀一振〔祐ノ字下ウカブリ計残ル名ノ物〕を献じたりと云。

これを現代語訳すると、「範頼の刀は無銘の物が一本残っている。先年、

瑞徳院慶邦卿の時代に銘がある太刀〔その銘は、「祐」の字、その下はウ冠だけが残っている名の物〕を献上したという」となる。ここで出てくる瑞徳院とは、鳥取九代藩主池田斉訓（なりみち）の法号である。しかし、慶邦卿については今後の課題である。

現在、太刀は最勝寺に保管されていた（写真）。最勝寺は二度の火災を経験しているが、それらを免れたのである。一度目は、天正の兵火である。天正の兵火については、後の鎧、馬具の記述を参照していただきたい。二度目が、昭和一四年の火災である。最勝寺のご住職のお話によると、この時、太刀は盗難にあい、鍛冶屋に売りに出されていたため焼失せずに残ったということである。

次に、範頼の鎧、馬具についての本文の記述は以下の通りである。

古鎧一〔螺鈿〕古鞍など残れり。

源範頼太刀（最勝寺蔵）

これを現代語訳すると、「範頼の古鎧一つ、古鞍などが残っている」となる。無駄安留記が書かれた頃には残っていたが、現在は残っていない。これらは、さきほど述べた昭和一四年の火災にあい、焼失したということである。しかしながら、この鎧、馬具も天正の兵火は免れていた。天正の兵火とは、天正九年（一五八一）の秀吉の因幡攻めのことである。天正の兵火について、『八頭郡誌』では、以下のように記述されている。

其時院主賢虫法師膂力抜群にして、本尊を負い彼の範頼の遺したる鞍鎧を馬に置き、什物少々此れに附け、仝氏の刀を佩ひ囲みを破りて僅に免るゝ事を得たりと云う。

仝十一年賢虫、豊公の命を受け一宇を建立し本尊を安置せり。

これによると、当時の一七代住職であった賢虫法師が、範頼の鎧や鞍、太刀、本尊を焼失から守ったということである。また、賢虫は秀吉の命を受けて、堂宇を再建したということである。

次に、如意輪観音像についての本文の記述は以下の通りである。

又明治九年丙子七月末に蒲公御墳の石垣崩て是を筑改む時、中より如意輪観音像の銅像を掘出せり。丈三寸計。是公の守本尊なりしにや。衆尊信す。

これを現代語訳すると、「また、明治九年丙子の七月末に、範頼の墓の石垣が崩れて、これを改築した時に、中から如意輪観音像が掘り出された。それは、丈三寸ほどだった。範頼の守り本尊だったのだろうか。皆尊信した」となる。ご住職のお話によると、この如意輪観音像は、最勝寺にはないということだ。出てきたという話はあるのだが、現在保管されていないということである。では、この観音像はどうなったのか。

実は、範頼にゆかりのある地は、最勝寺だけではなかった。現在の八頭町（旧郡家町）にある成田山青龍寺に観音像があるということである（『郡家町誌』）。また、旧門尾村中山という地名も重要である。門尾村は、明治二二年（一八八九）十月一日の鳥取県市制町村制施行によって、加茂村に変わった。『郡家町誌』には、「さて範頼の守本尊は当寺に残り、

往古の本尊と同体であったので、秘仏とした」という記述がある。この記述によると、本尊とは別に、範頼の観音像があったことがわかる。では、なぜ範頼の伝承がこの地に残っているか。

それを考えるために、範頼の子孫である吉見氏と範頼が逃れてきて、頼朝の追手がきたことについて触れておく必要がある。まず、追手について、無駄安留記本文では、こういう記述がある。

又蒲殿当寺江潜居の時、討手として梶原等来る時、この山下にて鮪の頭を焼きて火葬に託したるは是建久四年。今年迄凡六百八十年計。

これによると、頼朝が範頼を討つために、梶原景時の兵を派遣したとされている。また、『郡家町誌』では、範頼が潜居しているのを注進したとされるのが、守護であった大江広元であった。梶原景時が兵を率いて来た時、範頼は自害したと披露して、近臣が殉死した。そして、その葬式を中山で行った。このとき、七つの村の人々も参加しており、このことから以下の伝統ができたとなっている。

七か村の人々は翌日の元旦の歳徳神の祭事を葬式の開始されない間に餅を焼いて歳徳神に供えた。この例がその後七か村に残ったという。その七か村とは門尾・郡家・下坂・宮谷・奥谷・塚原・禰宜谷の各村である。

また、『因幡志』には以下の記述がある。

昔此村には源範頼の故事によつて正月の祝事を行ふものなかりしとかや。星移り物換りて今は知る人も希なり

これら二つの記述から七つの村では、範頼に関する正月の慣習が残っていたということを表している。また、現在はその慣習残っていない(『郡家町誌』)ということだが、最勝寺の先住のお話によると、禰宜谷では、今でもお正月の餅を焼かないということを聞いた。

続いて、吉見氏について、本文の記述は、以下の通りである。

侭又蒲公の御子孫相続て、国侍にも吉見氏を号し、出雲にも在。皆天正之年間迄も武名あり。巨濃郡岩常二上城にも在し由。

これを現代語訳すると、「さて、また範頼の御子孫が続いて、国侍でも吉見氏を号しているものがおり、出雲にもいる。皆天正の年間までも武名があった。巨濃郡の岩常二上城にも吉見氏がいたということである」となる。『郡家町誌』によると、範頼の嫡男である範国という人物が、姓を吉見と改め、門尾の中山に住居したとされるということである。

これらの記述より、最勝寺以外の場所にも、範頼の伝承が残っているということがわかる。越路村という地名にも、範頼に関する伝承が残っている。『八頭郡誌』には、以下の記述がある。

範頼の夫人はその当時現今の岩美郡越路にあり。当処今尚其の墓碑を存す。越路は元此故を以て恋路村と書きしも中途越路村に改めたりと。

これによると、範頼の夫人の墓が、岩美郡越路にある。これも範頼に

関する伝承の一つであろう。また、最勝寺のご住職によると、この改名は明治時代に行われたらしい。

最後に、本文に出てくる和歌をみてみる。

鎌倉の闇を凌ひて郭公　片山蔭の月に啼なり

この歌は、「範頼は、鎌倉で頼朝の追手を凌いでこの地に逃れ、片山の蔭から出る月に鳴いているほととぎすのようだ」と解釈できる。ほととぎすが鳴くことで、どこかさみしさを感じさせる和歌であると思った。

調査を通じて、最勝寺だけでなく、成田山青龍寺に如意輪観音像があることなど範頼の伝説が、各地に残っていることがわかった。この八上郡における範頼と地域の関係は、著者が無駄安留記を書いた当時から今も根強く残っているのではないだろうか。

【参考ＵＲＬ】

「市区町村変遷履歴情報　市制町村施行時の情報　鳥取県」

http://uub.jp/upd/s_tottori.html

（深川　和真）

現在の最勝寺

片山八幡宮

片山八幡宮は、鳥取市河原町片山の東方、八東川と霊石山の間にある。明治元年（一八六八）に改称されて、現在は国英（くにふさ）神社と呼ばれている。坂根地区にあることから、坂根八幡宮と呼ばれることもある。祭っている神は、気長足姫神、誉田別神、武内宿弥神の三神である。

『河原町誌』によると、はじめは片山字宮畑に鎮座していたが、天正九年（一五八一）、豊臣秀吉の鳥取攻めの際に社殿を焼失し、現在地に移ったと記されている。境内には樹齢約四八〇年の大イチョウ（鳥取市指定文化財）がある。この大イチョウは国英神社が坂根に移ってくる以前から存在していたようである。

国英神社には、イチョウに加えてもう一つの文化財がある。国英神社の梵鐘は紀年銘を持つ梵鐘としては県内最古のもの（正安三年（一三〇一）鋳造）で、鳥取県の保護文化財に指定されている。

梵鐘には「伯州久米郡　長谷寺鐘以青鳧　参拾三貫文鋳之　正安参季維夏五日　大工氷友末　勧進小比丘智元」という銘がある。この銘文から、梵鐘が元は伯耆国久米郡、現在の倉吉市にある長谷寺のものだったことが分かる。『鳥取県伝記集(上)　因幡編』という本には、この梵鐘にまつわる伝説が収録されている。

あるとき、坂根八幡宮の氏子たちは、

「この鐘には、長谷寺と刻んであるのだから、やっぱり、長谷寺に返したほうがいいのでは……」

と言い合って、打吹山の長谷寺に持って行って返しました。

すると、この鐘は、誰もつかないのに、夜になると決まって

「坂根に帰ろう、坂根に帰ろう」

と自然に鳴り出しました。

打吹山の近くの人々は、気味悪がって、今度は逆に坂根八幡宮にこの鐘を持って行って返しました。

以来、この鐘は、その銘文とは関係なく、坂根地区の国英神社の所有になっています。

長谷寺に持って行った梵鐘が国英神社に帰りたがったという伝説は残っていたものの、長谷寺のものであるはずの梵鐘がなぜ国英神社にあったのか、という理由は分からないという。現在この梵鐘は鳥取県立

博物館が借用しており、常設展示で誰でも見ることができる。

次に、無駄安留記の記述を見てみる。無駄安留記の本文で、作者は国英神社について次のように記している。

同　片山八幡宮　八東川傍に鎮座。
境内　絲櫻樹　中春花全盛。最も面白し。國中最一の老株は枯て今はなし。若樹漸繁茂に及ぶまでなり。

これを現代語訳すると、「同（八上郡）片山八幡宮。八東川の傍らに鎮座している。境内の糸桜の木は、春のなかばが全盛で最もすばらしい。因幡国いちばんの古株は枯れて今はない。若い木が漸く繁茂に及ぶほどである」という意味になる。

糸桜というのは枝垂れ桜の別名で、枝がしなっている様子からそう呼ばれている。この枯れてしまった古株の糸桜について、無駄安留記には次のような和歌が記されている。

賤やしづ　賤の小田巻　まき戻せ
今もむかしの　糸桜見む

これは、「賤の小田巻を巻き戻せ。枯れる前の昔の糸桜を今も見たい」と解釈できる。この和歌は伊勢物語第三十二段と古今和歌集より本歌取りをしたと考えられる。

いにしへの　しづのをだまき　繰り返し
むかしを今に　なすよしもがな

いにしへの　しづのをだまき　いやしきも
よきもさかえは　ありしものなり

伊勢物語の和歌は「糸を繰り返し小田巻に巻き取るように時を戻したい」、古今和歌集の和歌は「卑しいものも、高貴なものと同じように昔は栄えていた」という解釈になる。無駄安留記の和歌では、「しづ」という言葉に、賤しい身分という意味の「賤」と、昔の織物の「倭文」を掛けている。小田巻というのは糸を玉のように巻いたものの名称であり、くるくると回すので「繰り返す」という言葉の枕詞になっている。また、伊勢物語、古今和歌集と無駄安留記の間には、『義経記』の静御前による「しづのおだまき」の和歌がある。

しづやしづ　賤のをだまき　繰り返し
昔を今に　なすよしもがな

この和歌の解釈は「静よ静よと繰り返し私の名を呼んでくださったあの昔のように懐かしい義経の世に今一度したいものよ」となる。「しづのおだまき」は元々は恋愛に関する歌だが、無駄安留記では糸桜に対する作者の思いを表した歌になっている。

作者が当時見た若木が今も残っていれば、樹齢百五十年以上の糸桜になっているはずである。しかし、実際に現地を訪れた際、境内にそのような株を確認することはできなかった。地域住人の谷幸彦さんにお話し

を伺ったところ、少なくとも終戦前後にはもう桜は無かったそうだ。

国英神社を「片山八幡宮」と記載していることから、作者が訪れた時期は明治元年（一八六八）以前であろう。このことから、糸桜が無くなったのは明治時代から終戦前後、およそ八十年の間のことだと予想される。

ただ、『八頭郡誌』には「境内に枝垂桜の老樹あり」という記述と無駄安留記の和歌が記載されており、八頭郡誌の原稿が作られた大正十二年（一九二三）頃には桜が存在していた可能性もある。『八頭郡誌』の記述を基準にすれば、糸桜は、大正十二年から終戦前後、およそ二十年の間に無くなったと考えることができる。

今回の調査では、糸桜が無くなってしまった理由を明らかにすることはできなかった。境内にはイチョウの他にも大きな木が密集しているので、もしかしたら共存できず枯れてしまったのかもしれない。自然災害で枯れてしまった、戦時中の混乱で資料が無くなってしまったということも考えられる。

また、国英神社には「糸桜」「イチョウ」「梵鐘」といった、由緒のあるものが存在することが分かった。今では無くなってしまったり、詳細が不明だったりしたものもあったが、どれも国英神社の長い歴史を感じさせるものであった。

【参考文献・ＵＲＬ】

梶原正昭（校注）『日本古典文学全集31 義経記』昭和四六年、小学館
『河原町誌』昭和六一年
野津龍『鳥取県伝記集(上)　因幡編』平成元年、山陰放送
『八頭郡誌』昭和五七年
「日舞のスゝメ」　http://www.geocities.co.jp/PowderRoom/9182/newpage5.htm

（田中　千尋）

大義寺

大義寺の所在地は鳥取市河原町佐貫の中土居に位置している。寺の北隣に武田高信の墓地がある。

曳田郷　散岐村　大義寺に武田美作守高信位牌を安ず。この寺にて自滅せし也。

これは無駄安留記に出てくる本文であり、現代語訳すると「曳田郷散岐村の大義寺に武田美作守高信の位牌を安置している。この寺で自滅したのである」となる。

では、この武田高信がどのような人物であったかを説明する。

父の跡を継ぎ鳥取城の城番となった高信は鵯尾城にあったが、因幡山名氏に背きへの叛意を露わにし、鳥取城の奪取に成功する。二上(ふたがみ)城の三上兵庫の守とも通じ、因幡に勢力を拡大していった。そして、安芸の毛利氏とも手を結び、永禄六年（一五六三）に鹿野城にいた山名豊成（旧守護・山名誠通の子）を毒殺し、次いで湯所口の戦いで山名氏の重臣・中村豊重を敗死させる。因幡守護・山名豊数を天神山城から追い、山名豊弘を擁立して因幡国を実質的に支配した。高信は、毛利氏に従って但馬国・美作国に転戦するが、有力国人層の掌握に苦しみ、さらに因幡への進出を図る美作国の草刈氏や尼子勝久・山中幸盛ら尼子党の出没に悩まされるようになる。元亀二年（一五七一）、山名氏に属していた但馬国芦屋城の塩冶高清を攻めて大敗、嫡男・又太郎と次男・与十郎を失った（芦屋城の戦い）。翌元亀三年（一五七二）、因幡の国人衆の多くと誼を通じて甑山城に進出した山中幸盛率いる尼子党と戦い、決定的な敗北を喫した。天正元年（一五七三）、豊国と山中鹿之助の協力により高信は攻められ、連戦連敗して鳥取城に逃げ帰った。これを『稲場民談記』によると「たのも崩れ」と言う。（ウィキペディア「武田高信」より）

高信は敗兵をまとめて鳥取城に籠ったものの、城への攻撃は激烈であったので長期の籠城もかなわず、城兵を落としたうえ城を開け渡した。その後、尼子勝久にも大敗を喫して、鳥取城を守護・山名豊国に明け渡し、鵯尾(ひよどりお)城に退いてしまう。そして因幡国内の情勢は急変し、山名豊国は尼子から離れ、毛利と和議を結び、高信は鵯尾城をも追われる。天正三年（一五七五）豊国によって鵯尾城を追われ但馬国に逃れた高信は、かつて攻撃した芦屋城の塩冶高清を頼り、塩冶を通じて毛利氏に助命を願った。因幡国内で山名豊国の勢力が伸張する中で、但馬国の山名祐豊も高信の排除を吉川元春に求める。同年には息子・武田徳充丸への家督相続が毛利氏から認められ、高信の復権への道は事実上閉ざされた。高信は小早川隆景のもとに家臣二名を送り再度の助命嘆願を行うが、隆景

は高信の身の安全について言葉を濁している。高信は毛利氏から見捨てられたのである。（『稲場民談記』より）

次に、高信と大義寺についての関係は、高信は大義寺に、寺領等を寄進したといわれているが、天正十八年（一五九〇）の兵火により、残らず焼失し、寄進状も文献も残っていない。高信は戦勝の余威を持って領民を使役し、大義寺山を掘り崩して境内を広げ、大門を四十間も離れた田圃中に建てさせたと伝えられている。（『河原町誌』）

豊国は、高信を討つべく瞬間を窺っていた。『稲場民談記』では天正六年（一五七八）に、対立していた美作の草刈氏を討つためにおびき出され、謀殺されたと言われ、従来はこれが通説だったようだ。その内容は次のように記されている。

其ノ比智頭郡二草刈伊豆守ト云ウ者、新見ノ城二籠城シテ近郷ヲ切リ従エ、豊国ト不和ナレバ、此ノ手当トシテ人数ヲ出シ、是二事寄セ高信ヲタバカリ出シ討取ル可シトノ支度也。比ハ天正六年戊寅八月ノ事ナルニ、豊国ハ五六百ノニテ、八上郡迄打チ出ラレ、散岐ノ郷百丈山大義寺トイフ寺ヲ本陣トセラレシカバ、家老森下出羽守ハ釜ノ口二陣トリテ鵯尾高信ガ許へ使ヲ立テラレ、内々牒シ合スル如ク、此ノ度草刈ト一戦ヲ遂ゲ討チ果タスベキ支度ニ依リテ此ノ所迄出陣セリ。人数ヲ召シ連レ合力セラレ、此ノ所二出合イ、軍ノ掟ヲモ相談シ玉ヘトゾ云イ遣ラレケル。高信ハ尤モアルベキコトト思ヒケレバ、心得候ト領掌シテ、手勢二百計リニテ散岐近辺迄打チ出デ、陣ヲ張リテゾ控エタリ。豊国ヨリ又使ヲ以テ本陣迄来リ玉ヘ、明日ノ合戦云イ合スベキコトアリト、コトモナゲニ云越サルル。高信此ノコト心得難ク思ヒケレバ、如何アランと思案シケレドモ、武将ノ命辞シ難ク、却テ難渋ニ及ビナバ、其ノ色ヲ顕ハスベシト辞スルニ其ノ言葉ナク、人衆引キ連レ、大義寺へゾ赴キケル。豊国内々云イ合ハセ置カレケレバ、門ヲ固メケル番ノ者ドモ、御座所近辺迄ノ軍勢ノ共ハ無礼也。皆々是へ留メ置カレ、少々召シ連レラレ候ヘトテ、外ノ門ニテ留メケレバ、是非ナク門ニ残シケレドモ身ヲ離レヌ郎党ドモ五十人計リ推シ入リケル。内々此ノ条尤モ難儀成ルベシト評定ヲセシ事ナレバ、内ノ門ニ又番所ヲ構ヘ、是ニテ又固ク留メケレバ、高信モ心元ナキ気色ニテ、左右ニ目ヲ配リツツ、進ミ兼ネタル風情也。去レドモ若シコトモアラバ命ニ替ラント心掛ケシ身近キ若党ドモ九人迄門ノ内へハ入リケル。ヤガテ門ヲ指シ堅メ本堂近ク登ラントセシ処ヲ、心キキタル若者ドモ、大勢隠レテイタリシガ、時分ハヨキゾト飛ビ出テ、高信ニゾ組ミケルガ、如何シタリシケン組ミ損ジタリケレバ、敵味方入リ乱レ組ミ合イ切リ合フ隙モナシ。高信モ遁レヌ処ナレバ、太刀ヲ抜キ切リテ廻る。去レドモ大勢落チ合ヒテ、働クベキ様アラザレバ、皆ヤミヤミト討タレタリ。高信ヲバ森下出羽守ノ手ノ者ニ岸田豊後ト云フ者組ミ留メテ討チニケル。

ここでは、次のようなことが書かれている（『河原町誌』）。智頭地方に草刈伊豆守がおり、新見の城によって近郷を従えて豊国と仲が悪かった。そこで豊国は自ら五、六百の兵を率いて大義寺に本陣を構え、家老森下出羽守は釜口に陣をとらせ、使いを高信に走らせ「今度草刈と一戦し、討ち果たすべく支度をして自ら出陣した。願わくば来て協力せられたい」と告げた。高信は手勢二百ばかりの軍兵を従えて散岐近辺に陣を構えた。豊国はまた使いをもって「本陣までこられたい。明日の合戦について話し合いたい」と告げた。思案したがその言に従って高信が行く

と門前に兵を置き門を閉じている。番の兵が「御座所近辺まで軍勢を引き連れてくるのは無礼である」と言ったのでやむなく身を離れぬ郎党五十人ばかり連れて入ったが、また内の門に堅く留められ側近九人まで門内に入ったところ門が閉ざされた。高信が本堂近く上ろうとするところ、隠れていた豊国の家来大勢が飛び出て敵味方入り乱れて戦ったが、衆寡敵せず殺害された。高信は豊国の家来、森下出羽守の臣岸田豊後に討ち取られたとある。その後山名豊国は執拗な掃討作戦を展開し武田軍は総崩れとなって離散した。かくして、武田氏は決定的な敗北となり戦国の英雄は姿を消すこととなる。

さらに『稲場民談記』には高信の墓についてこのように書かれている。

高信ヲバ元ヨリ大義寺帰依ノコトナレバ、寺内ニ死骸ヲ納メテ墓ヲ築キ、供セシ者ドモモ同墓ニ築キ込メ、九輪ヲ立テ印ヲ残ス。今ニ彼ノ寺ニ残リケル。去レバ今ノ世ニ至ル迄、彼ノ古墳ノ印ヲ見テ其ノ来由ヲ聞ケル者ハ、懐古ノ哀レヲ催シツツ、ソゾロニ袖ヲ濡ラシケル。

「高信の死」には謎が多く、「吉川元春書状」では、高信は織田家への内通にかこつけて、豊国の謀略をもって、天正四年（一五七六）、大義寺で謀殺されたと言われている。しかし、近年の研究によれば、高信の死は天正四年よりもさらに早いことが判明している。天正元年（一五七三）五月四日付「小早川隆景書状写」（『萩藩閥閲録』）には高信について「不慮に相果て」と記しており、この書状が書かれた日以前に急死していたことが分かっている。ただし、この書状ではなぜ急死したのかについては触れられておらず、詳細は不明である。少なくとも、これ以降、高信から発せられた書状は確認されていないことからも、天正元年の春頃に高信が急死したのが事実となりつつあるようだ。天下統一期の混沌とした因幡国の情勢を解き明かすためにも「高信の死」の解明が待たれるところである。

現地には武田高信の墓があり、鳥取指定文化財になっている。中央の宝篋印塔が高信の墓で、共に死んだ家来の墓が両側にある。昭和五二年には、武田高信四百回忌の法要が営まれた。宝篋印塔はこれを記念し、『因幡志』の図に基づき復元したものであるようだ。今回の調査では高信の位牌を見る機会がなかったが、機を改めいずれ確認したい。お堂の前の檜は、高信最後の時、胴甲冑を掛け置いたので、鎧がけの檜と呼ばれていたが、付近の水田収穫に害があるというので三、四十年前に伐採したと『因幡志』に載っている。

『因幡志』より

【参考文献】

『因幡志』、『稲場民談記』、『河原町誌』、『鳥取県史』、岡村吉彦『鳥取県史ブックレット／織田vs毛利―鳥取をめぐる攻防』（二〇〇七年）

（中本　祐介）

能引寺

能引寺は、現在の鳥取県八頭郡八頭町に位置している。後に記す虎女の由緒に因み山号を虎石山と号し、寺号を能引寺と称し、地蔵菩薩を本尊として安置し現在にいたっている。江戸時代には鳥取大隣寺の末寺で、宗派は臨済宗妙心寺派だが、『八頭町誌』や『稲場民談記』によると、虎女の叔父である僧、忍山が開基した貞応元年（一二二二）から寛正元年（一四六一）までは天台宗だったが、その頃に起きた逆乱で無住の寺となり、応仁年間（一四六七～一四六九）に京都建仁寺の和尚天隠が来住して禅宗に改められた。天隠和尚は詩文等の才があったようだが、残っていない。

この寺は、日本三大仇討の一つである『曽我物語』に登場する虎女という女性と大変ゆかり深い寺である。虎女は平安時代末期の大磯（現在の神奈川県）の遊女で、物語に登場する曽我十郎祐成の恋人である。虎御前とも呼ばれる。『吾妻鏡』には、

一日△丙申△曽我十郎祐成妻、大礒遊女、〈号虎〉雖被

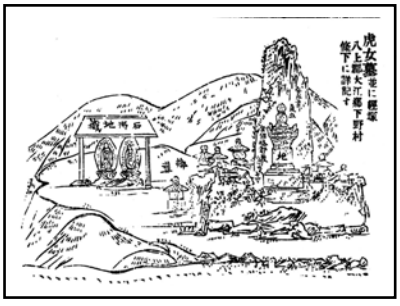
と記述されている。

曾我兄弟は建久四年（一一九三）五月二八日に富士の裾野において仇討本懐を遂げたが、祐成はその場で討ち取られ、弟の時致は捕らえられ、斬首される。『吾妻鏡』によれば、虎女は、

十八日△癸丑△故曽我十郎妾、〈大礒虎雖不除髪、著黒衣袈裟、〉迎亡夫三七日忌辰、於筥根山別當行實坊、修佛事捧

とあるように祐成の追善法要を営み、その後箱根に向かったとある。その後の虎女の事跡を、『因幡志』は次のように記している。

遁世して諸國を行脚し建久の末年にこの地に来り初めは坂田村の側にすみ居けるに前に戀慕の人祐成死せるの後是を求得んと欲して人をして遠近にその所在を索めしむ虎女身を隠すに便なく土人に計りてことを病死に託して僅にこの山奥御船谷といふ所にかくれ他事なく祐成の菩提を吊ひ一字一石の法華経書寫して遂に経塚を供養せり。



『因幡志』より

虎女は諸国を遍歴して現在能引寺がある場所に来て、草庵を結び、一字一石の法華経を写経し、経塚を建立して祐成の冥福を祈った、というのである。

能引寺について、無駄安留記にはこのように記述してある。

虎ヶ石　境内筥の中に在。是曽我十郎祐成妾虎女が古墳也。
其頃此地に竄住したる由。因幡志詳。

法華水　一字一石の法華経を写経して経塚を建立したる址なり。

これを現代語訳するとこのようになる。

虎ヶ石　境内の竹藪の中にある。これは曽我十郎祐成の妾虎女の墓である。亡くなった頃虎女はこの地で人目をしのんで暮らしていたということだ。『因幡志』に詳しく記されている。

法華水　一つの石に一文字ずつ法華経を写経して経塚を建てた址である。

無駄安留記本文の虎ヶ石と法華水のこのような説明には、ほかの文献とはかなりの差異がみられる。まず、虎ヶ石とは、本文では古墳としているが、『八頭町誌』や『船岡町誌』などの文献では、「一字一石の法華経を写経するときに虎女が座っていたとされる石のことである」としている。

また、法華水についての記述は大きく異なっている。無駄安留記では「一字一石の法華経を埋めた跡から湧き出た」ものであるとしているように解釈できるのに対して、『船岡町誌』は「高さ八尺ばかりの大岩が山門の右に残り虎が石といい、写経用の水を汲んだという小池を法華水といい、虎が石の下三間ばかりに残る。」『因幡志』にも同じように写経用の水を法華水、写経の時に座っていた石を虎ヶ石と記述されている。どうしてこのような差異がうまれたのかはいくつか文献を読んで調べてはみたのだが分からなかった。しかし、法華水とは一般的には「写経をするときに使う水」の事であるため、無駄安留記作者が間違って記述してしまった可能性も考えられる。能引寺にあった法華水は、水が枯れてしまったため、埋め立ててしまったとご住職がおっしゃっておられた。現在は埋めた跡に地蔵が置かれている。各文献の法華水の位置に関して見ると、『因幡志』では虎ヶ石の下三間にあると記され、『船岡町誌』では「虎ヶ谷の下三間計りに在り、井の深さ凡三尺四方なり」と記されていた。文献から見ると法華水の位置は地蔵の位置と同じではないようだった。実際の法華水をこの目で確認できなかったのは実に残念である。

能引寺では、昭和六三年九月に位牌堂の床下から、無駄安留記に記されているような法華経約七万字の一字一石経（「妙」「無」「佛」などの大量の経石）が発見された。そもそも法華経とは、経文を小石一つに一字ずつ書き写したもので、先祖などの冥福を祈って地中に埋めるものだと、されている。

次の記述が無駄安留記にある和歌である。

鎌倉の春を見捨ていなばなる
大江の奥に花はちりけり

これを現代語訳すると、「華やかな中心地である鎌倉を捨てて虎女は因幡に来た。その虎女は大江の郷の奥にあるこの能引寺で亡くなったんだなぁ」と解釈できる。こうあるように作者の能引寺の印象には虎女が強く残っている。それはもちろん、能引寺が建立された理由が、虎女だからであろう。前記した通り、虎女は日本三大仇討の一つ、曽我物語に登場する祐成の恋人である。曽我物語は作者不明で、鎌倉時代に書かれた、曽我兄弟の仇討や、兄弟の愛情と孝心、敵を討つまでの苦心、本懐後の死への同情、黒髪を切って十郎との情に殉じる虎御前の生き方などが、語られている話である。『曽我物語』の影響は謡曲、幸若舞曲、古浄瑠璃におよび、江戸時代には近松モノを含めて一〇〇〇種もの「曽我物」が江戸三座で競演され、世間に多く広まっていった。ご住職のお話によれば、その当時能引寺でも演じられ、五里（凡そ二〇キロメートルほど）も離れたところからこれを見るため、能引寺に訪れる人も多くいたそうだ。

法華水と一字一石経に関して、『稲場民談記』には記述が全くされておらず、その代わりに「虎御前御影ノ木像」のことが次のように詳しく書かれていた。

寺中虎御前御影ノ木像アリ。大キサ四寸計リアリ。其ノ形、髪ヲ肩マハリニ切リマハシタル垂レ尼ナリ。ウシロニ頭陀袋ヲカケ、足ニ草履ヲハキ、杖ヲツキ諸国修行ノスガタナリ。

しかし『稲場民談記』は、寺にはこのほかには「伝ハリタル物ナシ」と記し、続いて「虎石山」という山の名は、姿が虎に似ているからか、または山中に虎の形に似た石があるからそう名付けられたのであり、後にその山の名に付会して虎女が住んでいたように言いなし、木像をつくったのだろうと言っている。『因幡志』はこれに対して、先に述べたように、虎女が因幡に来て、江の里で没したことを史実と判断しているのである。

虎女は全国に多く伝承を残している。例えば、陰暦五月二八日に降る雨のことを「虎が雨」「虎が涙」といい、俳句の季語や歌川広重作東海道五十三次の「大磯」に用いられていることや、島田髷を最初に行った

人物とされることなどである。また能引寺にある虎女の墓に願をかけると美人になるという。多くの伝承を残してこの世を去った女性虎女が、何を思って生きてきたのかは大変興味深い。

無駄安留記には、能引寺を絵におさめようとしていたのか、絵を描くためにページを開けていたようだが、結局そのページに絵が入ることはなく白紙となっていた。昔の能引寺の絵が入っていたのは『因幡志』だけだったが、そこには『稲場民談記』ではなくなったとされている虎女の墓のほか、石仏地蔵、松の木らしきものなどが描かれている。また、虎女の墓や経塚が描かれており、絵の向かって右の宝篋印塔が墓、その後ろが経塚となっている。同じような宝篋印塔と塚は今でも能引寺に存在し、塚にお参りした女性は美人になれるらしい。

私が寺を訪れたのは夏の暑い時期だったが、山の上にあるためか比較的涼しく、またそこから眺める景色も美しかった。虎女が暮らしたとされる地は虎女に負けず劣らず美しかった。虎女の墓はあったのだが、『因幡志』に描かれているような石仏地蔵は見受けられなかった。

（宮前　亜理紗）

善南寺

善南寺は鳥取市河原町釜口に位置する寺院で、弘法大師を祭っている。善南寺がある釜口村の方は「善南寺」という寺号ではなく「お大師さんのお寺」として認識されている寺である。

『因幡志』に「遠近此れを信仰するもの多くして年中殆んど参詣者の絶ゆる事なく、祭日たる毎月陰暦二十日、二十一日には参詣人一千人に登ると云う」との記述があることから信者が多くいたことが分かる。

善南寺について無駄安留記には以下のような記述と狂歌がある。

柏山善南寺とて往古梵宇の跡に近年草庵を建て弘法大師を安堵する
参詣多し　此後ろの柏越の右の山に木葉石あり

佐夜姫の真そを時雨に落葉して
何時の世かゝる石となりけむ

まずは記述の部分から解釈していく。「柏山善南寺とて、往古梵宇の跡に近年草案を建てて安堵する」を現代語訳すると往古梵宇が古くからある寺と訳すことができ、安堵は本尊として安置するという意味なので「柏山善南寺を古い寺の跡に近年建て、弘法大師を本尊とした」と訳すことができる。本文中の山号は「柏山」となっているが、実際の善南寺の山号は柏葉山である。これは本堂の屋根の飾りに「柏葉山」と文字が彫ってあったので分かった。

次の「参詣多し」は「参詣者が多い」という意味である。その次の「此後ろの柏越の右の山に木葉石あり」を訳すと「この後ろの柏越の右の山には木葉石がある」となる。この部分を詳しく見ていくと、「参詣者多し」の部分は『因幡志』にも同様の記述があった。ここで注目したいのは「木葉石」についてである。木葉石とは植物の化石である。この石が珍しかったため作者である米逸処は善南寺本文のみならず巻末の拾遺に木葉石の絵を載せている。この絵とともに「又智頭郡釜口奥柏山木葉石と云是又奇石ノ一なり　砕バ中ニ如図葉形数多アリ」が記されている。これを訳すと「また、智頭郡釜口村の奥に柏山木葉石という珍しい石がある。それを砕くとなかに図のような葉の形をしたものが多くある」となり、作者の木葉石に対する思い入れが

無駄安留記拾遺巻九裏より

強かったことが分かる。現在も木葉石は採掘可能で、また国府町でも採掘できるそうである。

次に狂歌の解釈をする。

佐夜姫の真衣を時雨に落葉して
いつの世から石となりけむ

この狂歌を解釈する際に気になるのは「佐夜姫」という人物である。佐夜姫なる人物について調べたところ、この人物は無駄安留記や因幡国とは直接関係の無い人物だということが分かった。大まかに佐夜姫なる人物を説明する。佐夜姫は松浦佐用姫の別名とされていて、主に北九州地方に伝わる伝説上の人物である。松浦佐用姫は元々松浦地方の長者の娘であった。佐用姫は朝鮮半島の任那、百済を救済せよという朝廷の命を受け松浦を停泊地としていた青年武将大伴狭手彦と恋に落ちる。そして出帆の時を迎えるのだが、彼女は別離の悲しみに耐え切れず山を駆け上り軍船に向かって身にまとっていた領巾を振った。それでも名残はつきずに佐用姫は海へと飛び込み追いすがったが船の姿は既に無く悲しみのあまり七日七晩泣きはらし、ついには石になってしまったという物語である。この物語は万葉集でも詠まれている。

では何故この因幡国と直接関わりの無い佐夜姫を米逸処は記したのであろうか。それは本文中に記載されている木葉石と関係があるからだと解釈した。作者である米逸処は、長い年月をかけて植物が化石となった木葉石と、恋人との離別で泣きはらし石になってしまった佐夜姫を狂歌で結びつけたのだろう。

今回調査を行った善南寺は、無駄安留記に記されている大安興寺の末寺に当たるため大安興寺を訪れた際に、善南寺の事もお話を聞かせていただいた。大安興寺の御住職の話によれば現在善南寺の管理は善南寺が位置する釜口村に一任しているそうである。そのため祭事も村の方が行っているそうだ。『因幡志』に善南寺では毎月祭事が行われているとの記述があったが、御住職の話によると現在では年に一度大祭を行うだけであるということであった。

また現地調査に赴いた際、釜口村の方にお話を伺う事もできた。この方の話では大祭以外でも月に何度か参詣されているそうである。

筆者が描いた無駄安留記中の絵を最初に見た時、善南寺は山の中に建てられている寺院のようであった。当時下にはお墓があり、本堂のほかに像などもあったことも絵を見て分かった。実際に現地調査に行き善南寺の写真を撮ったが、寺までの道のりは決して緩い道ではなく険しい坂道になっていた。写真は本堂だが、善南寺は常駐の住職がいない寺院であったが細かく手入れを

している様子が見て取れ、釜口村の方が頻繁に訪れて丁重に管理されていることが伺えた。

また境内を眺めた限り、大まかな部分は本文中の挿絵と変わらないようであった。しかし、現在の善南寺には本文の絵には無い鐘があった。この鐘をよく見ると寄進者の名簿があり、記された年月から無駄安留記が記された当時よりも後にできたようだ。この点を除いては、作者が見た善南寺の様子と私が見た善南寺は大きく変わらなかったということが分かった。このことから善南寺は兵火や災害等の影響を受けず、保護されてきたのではないだろうか。

無駄安留記の作者である米逸処が善南寺を記載した理由とは、どうしてなのだろうか私なりに考えてみた。一つは、作者は景観が良かったため善南寺を無駄安留記に記載したのではないだろうか。下からの眺めも良かったが寺の敷地内も非常に綺麗に整備されていた。現地で善南寺を見た感想としては、本堂から見た景色も非常に眺めが良かった。現在も、当時作者が見ていた景色を見ることができるのは素晴らしい事だと思う。もう一つは、善南寺の木葉石である。木葉石に非常に興味を持った作者は後世にこれを記そうと思い、佐夜姫に重ねて述べたのではないだろうか。

最後に、無駄安留記の時代にも重なる善南寺の美しい景観を後世に残し、多くの人にこの光景を味わって欲しいと思った。

（内野　優三郎）

大安興寺

無駄安留記には釜口村と書かれているが、大安興寺は鳥取市用瀬町鷹狩の医王山の麓の国道沿いに位置する。大化元年（六四五）、法導仙人の開基とされる。かつては医王山山頂に寺院があったが、昭和三七年火災により焼失、昭和四〇年に現在地に移転してきた。無駄安留記では八上郡としてまとめられているが、執筆された当時、大安興寺は智頭郡に属していた。

無駄安留記の大安興寺に関する文章は以下の通りである。

八上郡

釜口村　醫王山大安興寺　往古は大伽藍なりしか天正の兵火焼亡。今僅かに仁王の目玉、古茶釜あり。此茶釜故ありて他のもとに在しか夜毎に帰んことを悲しみて呼ふ。主恐怖して寺に帰すと。奇談なり。此地寂寥として閑静の境内なり。

櫻花 いずこ仁王の眼の玉が
　はなならとのみみないおう山

醫王山の衆徒の古墳　田中に五輪数多あり。天正の兵火に死亡す。

そこで、報告では、本文に即し、㈠大伽藍、㈡兵火、㈢仁王の眼玉、㈣茶釜、㈤歌、㈥古墳・五輪について述べたいと思う。

無駄安留記の大安興寺の本文冒頭には以下の文章がある。

往古は大伽藍なりしか天正の兵火焼亡。今僅かに仁王の眼玉、古茶釜あり。

これを現代語訳すると、「かつては大きな寺院であったが、天正の兵火により焼失し、今（無駄安留記が執筆された当時）は仁王の眼玉と古い茶釜だけが残っている」となる。

㈠まず、医王山山頂の現地調査を行ったときの様子をもとに、大伽藍について述べる。

山頂への登山道は河原側と鷹狩側の二通りの道があった。これらは明治三三年（一九〇〇）陸軍省陸地測量部

明治三三年陸軍省2万分の1地形図

河原側参道入口

本堂跡前階段と灯籠

により制作された地図でも確認できる。前者は上りに利用した道で、傾斜は比較的緩やか、後者は下りに利用した傾斜が比較的急な道であった。所要時間は登り約四〇分、下り約三〇分だった。

『広報もちがせ』（四〇八号、二〇〇〇年）の大安興寺旧地図（付録二に掲載）によれば、山頂の境内跡は入り口から奥まで約一〇〇メートル、横幅約三〇メートル、本堂跡が階段から奥まで約三〇メートル、横幅四〇メートルで、かなりの広さがあった。

建物は残っていなかったが、無駄安留記の絵に描かれている供養塔や灯篭などは絵の通り残っていた。また、土蔵や物置の跡も残っていた。

㈡兵火について述べる。

大安興寺は前記の昭和の火災のほか、幾度か兵火により焼失している。

『用瀬町誌』によれば、永正一一年（一五一四）土卒乱入により兵火にかかった。詳しいことは不明だが、『用瀬町誌』によれば、十四世紀後半からの山名氏（山陰地方）と赤松氏（播磨）の争いが関係しているという説がある。

また、天正年間（一五七三～一五九二）、長福寺（現、東光寺　鳥取市用瀬町古用瀬）とともに兵火のため焼失している。『八頭郡誌』によると、因幡山名氏の家臣であった武田丹波守高信が当時の八上郡散岐郷を押領した際に焼き討ちに遭い、焼失した。

両寺の記録が『用瀬町誌』に引用されているが、兵火にかかった年号に食い違いがある。長福寺が天正八年、大安興寺が天正六年と記録されているが、同誌のその後の文章では、

> 因幡山田の四臣であった武田高信が、主家山名に叛いて山名に替わろうと図って、両者の争いは絶えなかったが、天正六寅戊年八月一七日に、山名豊国の謀りに陥り、大義寺で殺された。又因幡民談記においても「頃は天正六年 寅戊 八月の異なりけり」とある。こうしてみると、武信の来攻は、天正六年が正しいと見るべき（後略）

と、大安興寺の記録にある天正六年（一五七八）を史実としている。

大安興寺は、前述のとおり昭和三七年（一九六二）一月に火災にあっている。現御住職によると、同年の大豪雪により池の氷が二寸（六センチ）の厚さになっていたため、消火に使うことができず、寺院は全焼してしまった。この火災を機に、昭和四〇年、現在地に移転した。

㈢仁王の眼玉について述べる。

大安興寺の御住職によれば、山頂に寺院にあった仁王像の眼玉だという。先ほど述べた天正の兵火の際、寺院が焼失するとともに像が壊れ、ばらばらになってしまった。そして、何者かに持ち去られたのかもしれない、ということだった。その後、眼玉が寺院の近くの川の淵に沈んで

いるのが発見された。当時その付近ではアユやマスなどの漁が行われていた。その際、川の中から「光るもの」が見えたらしく、それが仁王の眼玉だったという。

眼玉は五輪塔をかたどった台座に納められているが、その下に以下の文章が刻まれていた。

醫王山　本尊　薬師如来ノ　白毫ニ王ノ玉眼　同行基之　御作也

上部の白毫は薬師如来のもの、その下の眼玉は仁王像のものということが読み取れる。

㈣茶釜について述べる。本文に以下のような記述がある。

此茶釜故ありて他のもとに在しが、夜毎に帰んことを悲しみて呼ぶ。主恐怖して寺に帰すと。

これを現代語訳すると、「この茶釜は訳あって他の場所にあったが、大安興寺に戻ることを嘆願し、毎夜その名を呼び続けた。持ち主は恐れをなして茶釜を寺に返したという」となる。大安興寺の御住職によれば、「毎晩呻き声を上げてうるさいので、杉森という山奥の村に茶釜を預けた。杉森は現在廃村になっている。また茶釜も焼失してしまい、現在は残っていない」という。茶釜が寺に返却されたかどうかは分からなかった。

㈤歌について述べる。無駄安留記には、以下のように記されている。

櫻花何処仁王の眼の玉が
　はなならとのみみないわう山

これを現代語訳すると、「櫻花はどこにあるのだろうか。もし仁王の眼玉が鼻であったならば、その匂いをたどって櫻を見つけることができるのに、と皆が言うだろう」となる。唐突に「櫻花」という語が登場するが、他の文章と櫻の関係性は分からない。御住職によれば、この「櫻花」という語が御詠歌の歌詞に使われており、そのことを指しているのでは、という。

薬師如来白毫と仁王眼玉

㈥古墳・五輪について述べる。

無駄安留記本文では、歌のあとに大安興寺の末寺である善南寺の記述をはさむ形で以下の文章がある。

醫王山の衆徒の古墳　田中に五輪数多あり。天正の兵火に死亡す。

これを現代語訳すると、「大安興寺の僧侶の古墳、田の中に五輪（塔）が、多くある。天正の兵火で死亡した者達の墓である。」となる。恐らく、この文章は後から書き足したものではないだろうか。文献にはこれらに関する記述がなかったため、御住職に話を伺った。まず、「古墳」については、医王山が岩山であるため、人が入ることのできる祠のようなものは数多くあるというお話しだった。

一方、「五輪塔」については、「江戸時代の元和期以降の住職の墓として、醫王山山道五輪塔がある」ということであったが、「田中に五輪数多あり」、「天正の兵火に死亡す」という二つの文章とは合致せず、無駄安留記の五輪塔とは別のものを指していた。お話があった五輪塔は、帰りに利用した鷹狩側の登山道の途中で確認できた。

五輪塔については詳しい情報は得られなかったが、この文章は筆者が死者を追悼し、書き加えたものではないだろうか。無駄安留記には作者が印象に残ったことを記載した部分が多く見られる。恐らく、天正の兵火の死者に対する追悼の意が強く、筆者に大きな印象を与えたのではないだろうか。

仁王の眼玉、茶釜については史料等が見つからず、非常に苦労したが、今まで研究がなされなかったところを調査できたのではないだろうか。調査内容は浅い面があるかも知れないが、とてもいい経験ができたと思っている。

（進　優基）

現在の大安興寺

おわりに

本年度の調査全体について感じたことを述べたいと思う。まず、調査においては、現地調査や取材、文献などを用いたが、現在の国英神社の片山八幡宮、善南寺などは該当史料が少なく調査が難航した。私の担当した大安興寺も、寺に関する情報は見つかったが、仁王の眼玉、茶釜に関する情報は少なく苦労したのを覚えている。また、調査を始めた最初の頃は、どのように調査を進めればいいか分からず、戸惑うことも多かった。だが、後半からは意欲的に取り組むことができ、班員同士で協力しあって調査を進めてきた。ここまで調査を進めてこられたのも、三人の担当の先生方のおかげだと思っている。

次に、無駄安留記八上郡全体の総括をしてみたい。まず、今回の調査では売沼神社、最勝寺など寺社が大半を占めていた。また、三滝の雨の言い伝えや虎女、源範頼、武田高信など、様々な伝承や戦国時代の武将なども見られた。千手観音菩薩のように寺院が建立されてからずっと保存されているもの、仁王像の眼玉のように火災などの憂き目に遭いながらも残存するものもあり、歴史の奥深さを実感した。

次に、売沼神社、最勝寺、正法寺、大安興寺の旧境内など、無駄安留記に描かれている絵と一致する場所も多くあった。ただ、三滝と能引寺については絵を描くためと見られる空きページが用意されているだけで、絵自体は描かれていなかった。だが、絵に関して、作者がかなり正確に描いていることには驚きを覚えた。

三つ目には、無駄安留記本文には作者が印象に残ったことを記述した部分が多く見られる。八上姫、隆盛期を過ぎた寺院、糸桜、虎女、高信、源範頼について、大安興寺の兵火の死者などに、そういったところがよく表れているように思う。

ここで、今回の調査で多くの寺社との関わりを持つ天正の兵火についても触れておきたいと思う。具体的には以下の三つである。

㈠武田高信の散岐郷押領の際発生した、天正六年（一五七八）の兵火。大安興寺が焼失（『用瀬町誌』）。

㈡豊臣秀吉（当時羽柴秀吉）来伐による天正九年（一五八一）の兵火。最勝寺、片山八幡宮が焼失。正法寺も兵火にかかる（『河原町誌』）。

㈢大義寺が焼失した天正一八年の兵火。詳細は不明。（『河原町誌』）。

これらの中でも特に最勝寺、片山八幡宮、正法寺など、多くの寺社を兵火にかけた㈡の豊臣秀吉の来伐について述べたいと思う。秀吉は天正八年、同九年の二度にわたり侵攻したが、ここでは、天正九年の来伐について触れる。秀吉が兵糧攻めにより鳥取城を落とした「鳥取城の戦い」（一五八一年）は有名であるが、今回の調査では八上郡にも秀吉来伐の影響が見られた。無駄安留記本文に関するものでは、前述の通り三つの寺社が焼失している。ただ、正法寺のみは詳しい時期が書かれておらず、兵火にかかったのが天正八年か、九年かは分からない。また、秀吉は兵火にかけただけではなく、寺院を再興させてもいる。『河原町誌』によると、最勝寺について「天正九年、豊臣秀吉来伐の際、兵火により一山焼失した。しかし秀吉は因幡国平定の後、賢虫を招き再建を命じ、堂宇を建立した。」とある。

このように、調査を進めるにつれて、無駄安留記本文には登場しない秀吉が、鳥取に与えた影響は大きいものであるということが分かった。霊石山山頂から川の向かい側に至るまで広い範囲を攻めたことからも、秀吉の来伐は鳥取城の戦いだけではないということであろう。

今回の調査実習で、得たものは大きかった。現地に足を運び、自分の目で見ること大切さはもちろん、自分から動く積極性についても改めて考えさせられた。この経験をこれだけにとどまらず、これからの学生生活に活かしていきたいと思う。

（進　優基）

調査の記録

地域文化調査発表会

【開催日】２０１２年1月28日(土)

【場　所】とりぎん文化会館第一会議室

無駄安留記

八上郡